

早く言ってよ！

五月の初め、夫の祖母が亡くなった。九十二歳の大往生である。

長崎から広島に嫁ぎ、祖母はカーブを応援するようになった。戦後しばらくたったところのことだが、今でいう「カーブ女子」のはしりだったのだ。ただルールはよくわかっていなかったようで、一塁に牽制球を投げた投手に「どこ投げようるんじや！」と怒鳴ったこともあるとか。孫である夫が幼稚園に入った当時から、祖母は頻繁に球場に連れてい

列者だった。
読経が終わり、お焼香をあげ、親族皆で棺の中に花を置く。
「蓋を閉めますので最後のお別れをどうぞ」

司会者の言葉に戸惑った。何と声をかけようか。祖母とは結婚前に一度会ったきりだ。最期は孫のことも分からなくなっていたから、私のことなど覚えていないはずもないだろう。でも「安らかに」の一言では不十分な気がした。何せ、夫にカーブという唯一の趣味を授けてくれた人だ。「まもなく出発の時間です」の声が聞こえる。思わず

「夫と仲良くカーブを応援します」と祈っていた。

夕方、祖母は骨になり、親族とも



ども帰途についた。翌日は甲子園でカーブ戦だ。いつも通りに行こう。

くようになった。おかげで夫は筋金入りのファンへと成長。カーブの試合があれば、自宅から徒歩五分の甲子園球場へ。それ以外はCSでほぼ全試合を観る。外出先では、食事中だろうとスマホで頻繁に試合経過をチェック。付き合い始めて間もないころはイラっとした。今では同じことをしている私だけだ。

結婚前、夫がつぶやいたことがある。「おいら、趣味ないんだよね。趣味

……肉でどう？」
「……それは好物や。趣味はカーブで十分やろ」

どの口が言うとするんじやと思った。夫の中ではカーブは歯磨きぐらいの日常で、もはや「趣味」ではなかったようだ。

さて、お葬式である。広島で一人暮らしをしていた祖母は晩年、西宮の夫の実家に引き取られていた。葬儀は近くの斎場で行われ、親族と少数の友人・知人のこじんまりした参

しっかりカーブを応援するのが祖母へのはなむけだ。

「そうそう、おばあちゃんに『二人で仲良くカーブを応援します』って言っといいたからね」

ふと思いで出して夫に言う。

「あ、おばあちゃん、西宮に来てからはタイガースを応援してたよ」

「……早く言ってよ！」
とつつこんだ、初夏の夕暮れであった。

九月十八日、カーブは甲子園球場でセ・リーグ二連覇。幸運にも私たち夫婦はその瞬間に立ち会うことができた。宙に舞う緒方監督の姿を見つめながら、おばあちゃんのこと胸をよぎる。天国ではどちらを応援していたのかな。



我が家のクマもすっかりカーブ仕様になりました